

問題解決能力をはぐくむ活用型授業のあり方

- 言葉の型を中心とした活用型社会科授業の開発 -

所属校：東村山市立大岱小学校

氏名：神村 淳一

派遣先：早稲田大学教職大学院

キーワード：言葉の型・問いをもつ力・つなげる力・カルタ

I 研究の目的

新学習指導要領総則では、生きる力をはぐくむことを目指すために、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養う教育の充実に努めなければならない。」としている。これを受けて小学校社会科においても指導法の改善が求められている。

そこで、本研究では、まず、今後求められる学力について、学習指導要領の分析を行った。次に、言語を中心とした学習スキルの文献研究と、学習到達度調査（PISA）の読解力が世界1位となり注目を集めているフィンランドの教育方法の研究を行った。これらの研究をもとに、言葉の型を中心とした学習スキル(学び方)と、フィンランド・メソッドを社会科の授業に取り入れ、活用力をはぐくむ授業の題材プランを作成した。そして、具体的な教材の開発をし、検証授業を行った。これらの指導法を取り入れることにより、児童が社会的事象に対して自ら問題を設定し、仮説を立て、見通しをもって解決していく学び方を身に付けることができると考えた。同時に、他の教科にも転移できる指導法にしたいと考えている。

II 研究の方法

活用型の授業を開発するために、まず、新学習指導要領の分析を行い、社会科における活用についての考察を行った。次に、学習スキルについての文献研究、そしてフィンランド・メソッドに関する文献研究を行った。

以上の理論研究をもとに社会科における活用力をはぐくむ学習の条件を定義し、学習スキルとして社会科で身に付けさせたい言葉の型の一覧表を開発し検証授業を行った。

III 研究の結果

(1) 新学習指導要領の分析

新学習指導要領では、各教科にわたって言語活動の充実がもたれている。小学校社会科では、「言

語活動」を図る観点が強調されている。大切なポイントは、以下のように整理できる。

○社会科として体験的な活動のねらいを明確にし、事前・事後や現地における指導の充実に図ること。
○「考えたことを表現する力」を育てることを重視し、表現活動を指導計画に適切に位置付けて効果的に指導すること。さらに、中央教育審議会答申社会科（小中高）の改善の基本方針では「事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述すること」「考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うこと」と示されている。そして小学校学習指導要領社会編の各学年の「表現」においては、3・4年：「相手に分かるように表現する」、5・6年：「根拠や解釈を示しながら図や文章などで表現し説明する」と示されている。

これらの記述内容を見てもわかるとおり、「思考力、判断力、表現力」を関連的・一体的にとらえており、「思考の言語化」を重視する方向であると言える。また解説において「学習問題に即して調べること」と記述されていることにも着目したい。すなわち学習問題に即して調べた事実(社会的事象)について、根拠となる資料(地図、年表、統計など)を示したり自分の考えを交えたりして表現する活動の充実が求められている。その際、事実と予想や考えを区分した発言、具体と抽象とを行き来する発言、問いを見出す発言、「～です。それは～からわかります」「～と思います。なぜなら～」といった言葉を使って社会的事象の意味や相互関係などについて述べる発言や、「～であるのに、なぜ～」という問いを見出す発言をいかに児童から引き出していくかが大切である。

(2) 「活用」についての分析

言語活動の充実が求められる大きな背景として、各種の学力調査結果がある。その結果から、児童の思考力・判断力・表現力等の課題が指摘されている。つまり知識・技能は一定程度もってはいても「活かせない」「使えない」という児童の実態がある。このことから、知識・技能を活用することによって、思考力・判断力・表現力等をはぐくんでいくという方

向も新学習指導要領によって示されている。すなわち、知識・技能の活用目的は「課題の解決」(学校教育法第30条の2項)であるが、その先には思考力・判断力・表現力等を総合的にはぐくんでいくという大きな目的も示されていることを授業設計の際に意識しておくことが必要である。

また社会科においては、「活用」という言葉はこれまで「転移・応用」という趣旨で使われてきている。この転移・応用は児童が学習を通して獲得した「概念的な知識」や「見方・考え方」「調べる視点」などという言葉で研究されてきている。この転移・応用も「活用」ととらえて、その場面を意図的に設定していくことが大切である。

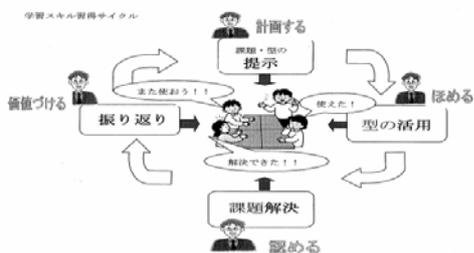
以上の理論研究の他、学習スキル、フィンランド・メソッドを参考にして、社会科における活用力をはぐくむ学習の定義付けや題材開発のポイント及び題材開発の実践に結びつけた。

(3) 検証授業の分析

社会科で身に付けたい力を言葉の一覧表として開発し、指導計画の中に位置付け、活用させる検証授業を行った。毎時、身に付けさせたい力を子どもに明示し、具体的活動を通してそれらを活用させた。その学習展開は、まず、課題とともにそれを解決するための方法を言葉の型として示す。次に、活用ができていない児童をモデルとして示し、全ての児童に解決の見通しをもたせる。授業の最後には、学習を通してどのような力が身に付いたのかを言葉で表現する振り返りも欠かさず行った。

その結果、自己評価で9割以上の児童が、学び方を身に付けることができた、という結果を得た。さらに、今後の学習にも活用したい、という児童も同様の結果であった。このことから、学び方を身に付けさせ、主体的な学びを展開する上で指導計画の中に身に付けさせたい学び方を明示し活用させることと、そうした力をメタ認知させ継続していくことが有効であることが分かった。

【学習スキル習得サイクル】図表1



IV 考察

児童の主体的な学びの態度、問題解決能力を育成していくためには、こうした取組を全校で系統的に指導していくことが大切であると考え。今回、検証授業において、社会科という時間だけでの指導であったため、児童の中には社会科だけの方法であるという認識が少なからずあった。どの教科でも、また学年が変わり、担任が変わっても、ある一定の学びのルールに基づいた学習ができる体制は、児童にも教師にも、とても大切であると考え。今後、全ての児童に主体的な学びの場を保障できるよう、学校全体で学びの体制を築いていくことを自らの課題とし、その普及に努めたい。そのために、学校全体としてどのような子供を育てたいのか、そのためにはどのような授業をしていくべきなのか明確にすること、そしてその具体化を図るための研究を学校全体で推進できる力を身に付けることを今後の課題としたい。

【社会科で身に付けさせたい言葉の一覧表】図表2

社会科 言葉の一覧表		コトバのふりかけ	使った!
考 え る た め の コ ト バ	順序	●まず、つぎに、最後に	
	順位	●1地番目は・・・2番目は・・・なぜなら	
	同じところ 違うところ	●同じところは・・・ ●違うところは・・・	
	比べる	●AとBを○○という点で比べると	
	問 い を た て る	●どうして～～だろう?	
		●どのようにして～～だろう?	
		●どうしてAは○○なのに、Bは△△なのだろう?	
		●○○の人たちは、どのような工夫や努力をして～～だろう? ●○○の人たちは、どのような思いや願いをもっているのだろう?	
	予想と理由	●たぶん～～だと思う。その理由は・・・	
	仲間わけ	●似ているものをまとめて題をつけると	
関 係 を み つ け る	●○と△に共通していることは		
	●○と△は～～という点でつながっている		
	●○と△の関係は ●○が～～になると△に変わります。		
き ま り を 見 つ け る	●これらのことから、○○ということがいえる。		
	●このことは、この○○というきまりにあてはまる。		
視 点	●○から考えると～ですが、△から考えると～です。		
話 し 合 う た め の コ ト バ	相手に 根拠を示して 説明する	●わたしは、～～だと思います。(まず結論、次に根拠) ○○を見てください。そこから～～ということが分かります。 このことから、私は～～だと思います。	
	分 か ら な い と こ ろ を 質 問 す る	●○○とはどういうことですか?	
		●○○とは何ですか? ●もう少し、～について教えてください。	
	理 由 を 聞 く	●どこからそう考えたんですか?	
		●どうしてそう考えたんですか?	
	比 べ る	●私は～～と考えるけど、どう思いますか?	
		●それは～～ということですか?	
	言 い たい 事 を 開 く	●言いたいことは～～ということですか?	
	ま と め る	●まとめてみると～～ということですか?	
		●つまり～～ということですか?	
例	●例えば、どんなことがありますか?		
経 験	●私のときは～～でしたが、そうでしたか?		
立 場 ・ 場 合	●～の立場で考えたらどうですか? ●～の場合はどうですか?		

